勝山春記

李孟鑑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勝山春記

【Ｎコード】
Ｎ１５９０Ｍ

【作者名】
李孟鑑

【あらすじ】
厳島合戦で大敗を喫した大内軍は、侵攻する毛利元就の前に連敗を重ね、ついには都山口を捨て長門勝山城に籠城する。悲劇の当主・大内義長の小姓であった杉民部が物語る、大内家最後の一日。

人物紹介

●大内義長（よしなが）
大内家の第三十二代当主。父は大友義鑑（よしあき）。兄に大友義鎮（よししげ）（宗麟（そうりん））。叔父にあたる先代当主義隆（よしたか）が陶晴賢ら重臣に討たれたのち、擁立されて当主になった。

●陶晴賢（すえはるかた）
筆頭家老であったが、厳島合戦で毛利に破れ、討ち死にした。

●杉民部（みんぶ）
物語の主人公。義長の小姓。

●内藤隆世（たかよ）
晴賢の義弟。厳島合戦ののち、晴賢に代わって義長の側近となった。

（一）

御屋形様の起きられましたのは、春の短夜も未だ明けきらぬ朝まだきのうちでございました。日頃よりお目覚めの早い御屋形様でございますが、今朝方は殊に早うございました。やはり昨日までの出来事のくさぐさに心身を責められ、よくはお休みになれなかったのでございましょう。かく言うわたくしとても、前の晩は身を横たえても心は千々に乱れて一向に休まらず、枕辺に灯した灯明の火影が壁板にちらちらと震える様を眺めながら、ほとんど眠れぬままに夜を明かしました。――わたくしは、周防大内家第三十二代当主義長様の小姓、杉民部でございます。

まんじりともせぬままにいつか灯油は尽き、部屋に満つる闇を受け止めようとするかに両の目を見開いていたわたくしの耳に、御屋形様の寝所の方より雨戸を繰るような音が小さく聞こえ、わたくしは床の上に起き上がりました。身繕いし、急ぎ廊下を渡って行きますと、御屋形様の、寝所の濡れ縁に立っておられるのが見えました。早暁の蒼ざめた薄明の中に、身に纏われた寝装束ばかりが白く冴えております。宿直の者が影のように周りを動いておりました。

御屋形様はわたくしに気づかれると軽く頷いて見せられ、それから再び、庭の方へと目を戻されました。寝所の前には坪庭がしつらえてあるのでございます。三坪ばかりの内に白砂を敷き、石組みを幾つか配した枯山水の庭でございまして、周防大内家、豊後大友家、能登畠山家などが合力して建立致しました京大徳寺の塔頭、龍源院の庭を模したものと聞いたことがございます。石庭ですから樹木はございません。いえ、ごく数本ばかり、置石の陰にツゲやツツジの類があるにはありましたが、どの木も、かろうじて命を繋ぐことの出来る瀬戸際まで枝を刈り込まれ、樹木と申しますよりは庭石の如

く変化(へんげ)させられておりました。ここ、勝山城のあります長門長府は、既に春も暮れようという頃を迎えておりましたが、その中にあってこの庭ばかりは何か、季節の移ろいというものからひとり置き忘れられたようでございました。ぼんやりと影を滲ませた石組みの周りに砂の色ばかりが白く目に沁みました。廊下の雨戸が次々と繰られていく音が、からからと遠く響きました。

耳だらいなどが運ばれて来て、御屋形様は小姓らに手伝わせて身繕いをなさいました。顔を洗い口をすすぎ、髭なども整えてしまいますと、御屋形様は履きものの用意を命じられました。暁の七つ半辺りで、出歩くにはまだ少し足元のあやうい時分でございます。周りの者は驚きましたが、御屋形様は

「出かけると申しても、ただ主郭へ参るだけのことだ。案ずるには及ばぬ」

そう申されて皆の心配を退けられ、わたくしに供を命じられました。わたくしは手燭を用意し、御屋形様の後に従って城館の門を出ました。館は勝山の山腹に立っております。裏手にはすぐ傾斜が迫り、急峻な山道を四半刻も上りますと、主郭のある頂に出るのでございました。夜明け前の静けさの中、空にはまだ星がわずかに残っておりました。ひんやりと湿った空気に包まれて流れる静寂は息をひそめるような深さに凝り固まって、それは何か、永久(とこしえ)の夜をわたくしに思わせました。御屋形様と、わたくしと、二つの足音が、一つに合わさってみたり、また二つに分かれてみたりしながら不規則な雨滴のようにひそひそと響き、峰々に漂う静けさを、否応なく我々の身の上に引き寄せるようでございました。

（二）

灯を掲げても足元は暗く、昨夜の内に降った雨が歩みをしばしばあやうくし、わたくしを冷やりとさせました。城に入って間もなくの頃にも一度、ちょうどこのように、かたわれどきの中を御屋形様の供をして主郭へ参ったことがございました。その時は先達（ぜんだつ）はわたくしではなく、隆世（たかよ）様でございました。御自身が生まれ育った城だけに道に慣れておられまして、「私の踏んだあとを歩めばよろしゅうございます」と言いおき松明を手に一足も踏みためらうことなくすらすらと山道を登って行かれましたが、その後ろ姿は頼もしいようでもあり、うっかりすると取り残されそうで怖いようでもあり、御屋形様もわたくしと似たことをお感じになられたのでございましょうか、「隆世、わたしを置き捨てる気か」と、笑いながら度々そのようなことを申されて後ろから声をかけておられました。

隆世様と申しますのは、御屋形様の側近を務めておられました、家老の内藤弾正忠隆世様にございます。一昨年、大内の筆頭家老であった陶晴賢様が、厳島にて毛利に不覚を取り討ち死になされましたのを覚えておられることと存じますが、その陶様に代わり側近に侍したのが、隆世様でございました。御屋形様に近侍なされた時ははたちになるかならぬかというお若さでございましたが、内藤の家は陶家、杉家と共に代々家老職を務めて参られたお家柄でございましたし、そしてまた、隆世様の姉君は陶様の元に嫁いでおられ、隆世様はつまり陶様の義弟でございました。そうしたお立場上の関わりから、内藤の家臣団、のみならず何よりも陶の遺臣の方々が、陶様の後を引き継ぐべきは隆世様であると、御屋形様に強く後押ししたのでございました。

勾配を上り切りますと、道は二の郭に入り、土橋を経て主郭へと

至ります。主郭は山の頂を削り柵をめぐらせて東西に細長く伸び、中央に館、西端の奥に鎮守の社を置くという造りとなっておりました。柵ぎわまで寄られ御屋形様は遠方へと目を注がれました。眼下には長府の平野が、平野の向こうには海が広がっております。西が響灘、東が周防灘で、この潮が長門と九州とを隔てる境でございました。

いつしか東より朝の光が覗いておりました。御屋形様と共に館を出た頃には暗碧に沈んでいた空はその色も薄らぎ、明るさを増しつつ徐々に遠のいて行くようでございました。そして大地の彩りは、光とも闇ともつかぬ薄青いもやの下から、明けゆく空に遅れまいと次々に甦って参りました。樹林の濃緑があり、若芽の萌黄がございます。黒く見えておりますのは土を起こした田畑でありましょう。ごくわずか、飛沫（ひまつ）の如く窺える紅の色は春椿の花でもありましょうか。全ては水を覗き込んだように澄明（ちょうめい）でございました。そして全ては水底（みなそこ）に没したかのように静謐（せいひつ）でございました。かすかに、潮の匂いが致しました。

「民部、海が穏やかだ」

御屋形様が申され、海の方を指差されました。まことに、波ひとつない海でございました。潮のおもては白い波頭も行き交う船もなく、光ばかりをたたえて静まり、あたかも磨き上げた瑠璃石の板を景色の中に碧く象嵌したかのようで、美しいような、物寂しいような、何とも不思議な眺めでございました。対岸の九州の山影が、筆でもって描きつけたようにくっきりと見えておりました。

「九州が見えまする」

「この方角ならば、見えておるのは門司（もじ）の辺りであろう。向こうは

晩春も過ぎて初夏の風が吹いておるやもしれぬ」

「やはりお懐しゅうございまするか」

わたくしが尋ねますと、御屋形様は海の彼方を見やる視線はそのままに、寂(さ)びたような笑みを薄く滲ませこうべを振られました。

「いや、それは違う。晴賢(はるかた)に乞われ叔父上の跡を継いだ時より、わたしの中では豊後も、大友の家も、帰るべき場所ではないのだ。こうして、この目で九州の地を見ても感慨はない。むしろ折にふれ気に病まれるのは山口のことだ。もはやわたしが考えるべきことでないのは分かっておるが、それでも、今は如何様な有様になっておるかと思われてならぬ。無論毛利の軍勢は入っておるであろうが……」

御屋形様は、遣る方ないため息をかすかに洩らされたようでございました。

（三）

わずかに半月の日かずしか経っていないと申しますのに、今こうやって振り返りますと、山口のことは既に悉く（ことごと）、夢のように遠い日々に感じられまする。しかし思えば、大内家自体が、陶様が厳島で亡くなられてから今日までの一年半のうちに、これがあの大内であろうかと我々自身が疑る程に、見る影もなく衰えてしまったのでございますから、山口の町が左様に感じられるのも道理かもしれませぬ。

――陶様に代わり筆頭家老となられました隆世様は、何をおいてもまず、その前年より続いていた毛利とのいくさを如何にすべきか、決めねばなりませんでした。陶様亡き後の家中はひとかたならず動揺しておりました。と申しますのは、七年前、陶様は政変にて先代当主であらせられました義隆公を廃位致し、先代様の甥御である御屋形様――義長様でございます――を豊後大友家より、新しき当主として擁立されたのでございますが、御屋形様は他家より参られて大内の家政には慣れておられぬとして、そののちも一貫して、政の大事な部分は悉く、陶様が動かしておられたためでございます。

この時毛利の軍勢は既に周防との国境を破り、玖珂（くが）の鞍掛（くらかけ）城を、杉隆泰（たかやす）様はじめ一千人の城兵もろとも平らげて、岩国に食い込んでおりました。今毛利と戦うのはあやうい、和議を結ぶべしとの声もございましたが、隆世様はいくさの続行を強く説かれ、常の隆世様とも思えぬかたくなな姿勢で、和議の声にはいっかな耳を貸そうとはなさいませんでした。

「ならばお聞き致しまする。和議を唱えられる方々は、逆臣に頭を下げよと、御屋形様に申されるのでございますか」

評定の席で、隆世様は激しい口調でそう申されました。逆臣とは申すまでもなく毛利元就殿のことでございます。元就殿は、先代義隆公を廃位なされました陶様のやり方を謀反と断じられ、主義隆の仇を討つためと、周防とのいくさに及びました。なれど七年前の変の折、元就殿はその前々より陶様とは密かに気脈を通じておられ、兵こそ出さなかったとは申せ、間違いなく陶様の側に立たれ、共に義隆公に背かれたのでございます。そして共に御屋形様を新しき当主に戴いたのでございます。それをのちになって義隆公への義を楯に御屋形様に刃を向けるとは、謀反はどちらでございましょうか。

――無論わたくしとても承知致しております。主の仇討ちなど元就殿の本意ではございません。元就殿が袂を分かたれたのは、知行あてがいなどを巡って陶様にご不満を抱かれたのが第一なのでございます。そして、元就殿のように陶様に何かしらの不満を持つ者は、国の内外に少なからずおりましたから、先だっての陶様の所業を謀反と言い立てるのは、そういった者たちを自らの与同（よどう）者に集めるためには都合が良かったという、それだけのことに過ぎません。

隆世様は陶様を実の兄の如く慕っておられました。その隆世様にしてみれば、離反し、陶様を討った毛利は断じて赦せぬものでございました。そしてまた、それは隆世様の後ろ楯となっております陶家家臣団の意向でもあったのでございました。

山口の守りを固めるということには、隆世様は随分と努められました。京の公家屋敷の風であった大内館には堅牢な塀を構え、堀をめぐらせ、また長きの籠城を考え、山口西方の鴻嶺（こうのみね）山上に大がかりな城の普請（ふしん）を急がせました。しかし、我々にとって誤算であり痛手であったのは、家臣団より離反の相次いだことでございました。陶様を失った動揺は我々が思う以上に大きかったのでございます。大

内の行く末を危ぶんだ者が次々と傘下を離れ、一方では国のおちこちに国人衆同志の揉め事も起こりました。その内紛を、御屋形様と隆世様には治めきることが出来ず、結果、更なる離反を招くこととなったのでございました。

毛利がいよいよ本腰を入れて攻略を始め、それでも一年近くの間は、徳山の須々万沼(すずまぬま)城にて山崎興盛(おきもり)様が敵を食い止めておられましたが、そこが落ちてしまいますと、あたかも山が崩れるかの如く、山口へ通じる徳地、防府両関の押さえであった右田ヶ嶽(みぎたがたけ)城も落ち、石見にて抵抗を続けていた益田藤兼(ふじかね)様も力尽きて吉川元春殿に下り、たちまちのうちに山口は、裸同然となってしまいました。

御屋形様の身を案じられ、隆世様はとうとう、山口を捨て御自身の領地である長門の城へと兵を退かれる決意をなさいました。左様でございます。それが先程からわたくしが話しております、勝山城でございます。勝山城は内藤家代々の居城でございましたが、南を青山、東を四王司山、西を竜王山が囲み、背後には白山、狩音山から峰を伸ばした大小の連山を負うという、天然の要害でございました。こうして我々は、まるで追われるが如く、二十四代弘世(ひろよ)公より二百年に渡って都であった山口の地を捨て、長門の長府勝山城に入ったのでございます。

（四）

勝山に籠城致しましたのはわずかに半月ばかりの間でございましたが、その短い日々のうちにも一日、わたくしには、忘れ難き美しい日がございます。その日は、何でも毛利方の総大将福原貞俊（さだとし）殿の母堂の命日にあたるとのことで使者が参り、合戦を一日休みにしたいとの申し入れがあったのでございました。

打ち続いたいくさにこちらの兵もくたびれきっていたところでございます。御屋形様は快く、申し出を承諾なさいました。使者を帰すと、御屋形様は近くにいた者に、城兵に酒を振る舞うよう、命じられました。それから傍らの隆世様に、皆をねぎらうための酒宴を開いてはどうかと相談なさいました。

「それはよきはからいにて」

隆世様はすぐに賛同なさいました。

「では宴は主郭にて開かれては。盂蘭盆会（うらぼんえ）が近うございます。山遊びという趣向は如何かと」

たかだか城山の天辺に筵を引いて酒を飲むだけのことを、山遊びなどと雅びて言い做（な）す隆世様の洒落心を皆は面白がりました。早速酒肴が整えられ、近習、諸将打ち揃って主郭へ上り、宴が開かれることとなったのでございます。

お人柄によるものでございましょうか。隆世様はこのように、周りの者の心を明るく引き立てることに、長けておりました。振り返れば陶様もまたそのような方でございました。陶様と隆世様、おふ

たりは、仲の睦まじさにしても、ご気性の似かよっておられることにしても、まことのあにおとうとのようでございました。――陶晴賢様でございます。のちには、様々の気苦労のためかあのように気難しいご様子になってしまわれましたが、お若い時分には、と陶様よりはたちも年若のわたくしがこのような物言いをするのは可笑しゅうございましょうが、お若い時分はたいそう明朗なお人柄で、快活な話術でもって何かと申しては座を華やかに盛り上げずにはおられない、左様な方であったのでございます。陶様は、特に幼少の折には義隆公より大変に寵を受けられ、寵童なども務められたことがございますが、それは眉目の麗しさ以上に、義隆公は陶様の明るい心根を愛でられたように、わたくしには思われるのでございます。

宴の日は、まことに心愉しき、のどかな一日でございました。天には春にありがちの、暖かな霞をうっすら纏(まと)ったような晴空が広がっておりました。地にはけだるく眠たげな、午後の日射しが黄色く注いでおりました。主郭より見渡せば、東に周防灘、西に響灘、潮は世の果てまでも碧く伸びて、陽はその一面に銀砂子を敷いたように群れ踊っておりました。山肌よりゆらめいて立ち昇るかげろうの向こうには、長府の平野におちこちと毛利の陣旗が細くたなびき、しかしその様すらも、何か心なごむ景色と見えました。

温い陽光の下に、皆は三三五五、思い思いに筵を広げました。炭火が起こされ、すぐにそこここに香ばしい煙が上がりました。餅を焼く者、干魚を焼く者、何やら凝った重を拵(こしら)えさせて来たのを振る舞って回る者もありました。

わたくしはと申せば、郭の一角に少々広く場を取り、他の小姓連中と相撲を取っておりました。土俵も定まっておらねば行司もいない草相撲でございましたが、大人の方々も面白い余興だと見物に参られたりなどして、もっと腰を落とせやら、手をしっかり掛けよや

らと周りから盛んに声を掛け、なかなかに賑やかでございました。わたくしは力には多少自信があり、三人ばかり次々と倒しましたが、惜しくも四人目の者に負け脇に下がりました。流れ出た汗を拭い、傍らから酒を汲んで飲んだのでしたが、息の上がったところへ酒を入れたせいか急に胸苦しさを覚え出し、わたくしは中座致しました。

わたくしはそのまま社の方へ歩いて行きました。社の周りには木々が茂っており、木陰で風を浴びようと思ったのでございます。社をまわり裏手に出た時、わたくしは少し離れた柵ぎわに誰か先客のあることに気づきました。木の陰から窺うと、それは御屋形様と隆世様でございました。柵の横木に並んでもたれ、海を眺めながら語らっておいででございました。

先程わたくしは、隆世様が側近に上られたのは陶家の家臣団の意向によるものが大きかったのだと申し上げましたが、しかしそれはおふたりの間が疎であったという意味ではございません。むしろ隆世様の明るく篤実（とくじつ）なお人柄を御屋形様は好いておられ、隆世様との仲は大変に良うございました。隆世様が御屋形様の元を訪ねることの繁かった辺りにもそれは表れておりましょう。ご機嫌を伺いに隆世様の方から顔を出されることもあれば、様々の用事が済んだのを見計らって御屋形様の方から呼ばれることもございました。

殊に勝山に移られてからは、おふたりが、日の落ちた縁に座りお話を楽しまれなかった日は一日もなかったのではございますまいか。そうして、何事を話し合われていたかと申せば、いくさや、防長をめぐる情勢や、そういった政を口の端にのぼすこともないではございませんでしたが、しかし大抵は、ありていに申しますとどうでもよいことばかりでございました。幼き折の思い出であったり、たまたま目にとまった、鳥や、月や、雲や、そういったものの話であったり、またはその時々の心持ちのことであったり、端で聞いており

ますとさほどに面白いとも思えぬ話を、おふたりはいかにも面白げに、愉しげに、語らっておいででした。

そしてそういう時、御屋形様は別人のように朗らかな笑い声を上げられました。かつて義隆公が少年の陶様にお心を慰められたように、隆世様の明るい瞳もまた、ともすれば鬱しがちの御屋形様にとって慰めであったのでございましょう。傍目にも察せられるおふたりの幼友達の如き遠慮のなさを、契り交わした義兄弟の如く互いを思うお心を、わたくしは幾度となくうらやんだものでございました。

（五）

柵にもたれて話し込まれている御屋形様に気づいたわたくしは、涼むのをやめそのまま戻ることに致しました。無礼講の宴の席とは申せ、汗まみれのむさ苦しいなりを現すのは如何にもぶしつけと思ったのでございます。そっとくびすを返し来た道を引き返そうとした時、

「隆世、勝山の城はいつ落ちる」

御屋形様の声が聞こえ、わたくしは思わず足を止めました。

「さていつになりましょうか」

隆世様が答えました。剽（ひょう）げてでもいるような呑気な口振りでございました。その呑気な声音のまま、隆世様は言葉を継ぎました。

「御屋形様もご存知の如く、この城は四方を険しき山に守られた天然の要害にございます。矢弾、玉薬、兵糧も充分にございます。それゆえあとは兵の士気しだいということになりましょう。士気さえ高ければ一年でも持ちこたえられまする。なれど士気が折れてしまえば、明日にでも陥落かと」

隆世様の申される通りでございました。実のところ、山口を捨てることが決まった辺りから、我々には負け戦が日に日に色濃く見え始めておりました。安芸と石見と、二方から囲む毛利に抗し得るだけの兵力は、既に大内にはございませんでした。そして豊後大友家よりの援軍も望むべくもございませんでした。幾たびにも渡る御屋形様の要請にも拘らず、ここに至っても令兄の義鎮（よししげ）様は兵を動かす

気配すらなく、裏で毛利と結んだものと見て誤りはなさそうでございました。もはやこの頃には勝ち負けではなく、城が落ちるのはいつかというところまで来ていたのでございます。

「ははは、明日か」

と御屋形様は、しかし声をたてて笑われました。隆世様の言葉を心底愉快がっておいでのような、軽やかに弾んだ笑声でございました。葉叢（はむら）の陰からそっと窺うと、御屋形様は、横木に手を掛けられ身を乗り出すようにして、空を見上げておいででした。その横顔が、こちらから見えておりました。そうして宙高くを見上げた目に、さっと光のみなぎったと思うと、

「いつ落ちようが、わたしは構わぬ」

一言、力強くそう申されました。

「わたしの命が明日尽きるさだめであるならば、それもよい。また一年ののちであるならば、待つ愉しみが出来るというものだ」

「命など惜しみますまい。この世の森羅万象悉（ことごと）くは所詮（しょせん）夢にござりまする。全ては夢の中から参って我々の前に束の間、かりそめのうつつとなり、しかし過ぎ去ったのちは再び夢に戻るのでございます。このいくさも夢、毛利も、周防も夢、何を惜しむことがございましょう」

「我が大内家もまた、泡沫（ほうまつ）の夢であるな」

そう申されて再び、御屋形様は愉しげに笑われました。隆世様はそんな御屋形様を優しげな笑みを浮かべて見つめておられました。

けだるい陽光の中に、笑んだ唇が紅の花となって浮かんでおりました。彼方には周防灘の海原が、波頭(なみがしら)をまばゆく騒がせておりました。

わたくしは皆々の声を背後に小さく聞きながら、踏みしだいた草の香の中に立ち尽くしておりました。自らのお命をすっかり見切ってしまわれた御屋形様の言葉に、身がすくんでしまったせいもございます。がしかしそれ以上に、わたくしは、おふたりの間に流れていた、語る言葉とは裏腹の明るさをたたえた静穏に、心打たれていたのでございました。

全てが過ぎた今、分かることがございます。御屋形様と隆世様の間にはあの時既に、勝山落城の日には手に手を取って共に死に赴(おもむ)こうという誓いがかわされていたのではございますまいか。申しましたように、城は遅かれ早かれ陥落が見えておりました。隆世様と共に戦い、生きることよりも、共に死ぬことこそがもはや御屋形様の唯一の願いであり、むしろその日を憧れをもって待ちわびるような、そのようなお心になっておられたのでございましょう。その願いは、それきり叶うことなく虚(むな)しくなったのでございましたが――。

（六）

明け方の主郭にて、御屋形様は柵にじっと身をもたせたまま、長いこと、日の高くなるにつれ眼下に様々と色あいを変じてゆく林野や山々を、目に映じておられました。海はその間中、ずっと穏やかでございました。人は波の立たぬ海を喜びまするが、まこと左様でございましょうか。波頭の一片も見えぬ海は如何にも寂しゅうございます。命も、時の流れすらも絶え果てたような、風音もなく、波音もなく、ただ碧いばかりの海は物悲しゅうございます。これはわたくしの心に、あの宴の日に主郭からのぞんだ波の輝く周防灘の海原が、強く灼きついているせいでありましょうか。

そうして、そのまま二刻以上も時を過ごした頃

「御屋形様――」

遠くに呼ばわる声がして、土橋の方から人影が駆け上がって参りました。

「そろそろ館にお戻り下さい。じき駕籠の仕度が整いまするゆえ」

急な山道を急ぎ駆けて参ったのでございましょう、肩で荒い息をつきながらそう言いました。御屋形様は頷かれて

「相分かった、すぐ参る」

とご返事なされました。わたくしは、御屋形様がお目覚めから何も召し上がっておられないことに気づき、その者が一礼して戻りかけたところを呼び止め、朝げの用意をしておくよう申しました。が、

御屋形様は、いや、朝げはよい、とわたくしの言葉を遮られました。

「ですが、御屋形様は昨夜も、あまり量を召し上がってはおられませんでした。ご気分がすぐれないのでございましたら、せめて葛湯なりと召し上がって下さいませ。お体に障りまするゆえ」

「何、そうではない、ただ今日は腹を空にしておきたいのだよ。心配をかけたな」

御屋形様は口元に笑みを浮かべ、わたくしの肩の辺りをいたわるように掌でさすられました。重ねて強いるのもためらわれ、また御屋形様の申されたことの意味がよく呑み込めなかったわたくしは、ただ曖昧（あいまい）な返事をしたばかりでございました。

くびすを返し、御屋形様はすぐに主郭を下りられました。勝山より一里ばかり南へ下った長福寺に、御屋形様は今日のうちに身を移されることとなっていたのでございます。わたくしも、供することを許されておりました。

――山遊びの思い出を追うあまり語るのを忘れておりました。左様でございます。勝山城は開城と相成ったのでございます。

一昨日でございました。青山の出郭に毛利より、和睦を求める矢文が、投げ込まれたのでございます。和睦の条件は次の通りでございました。勝山城を明け渡すこと。城主内藤隆世は逆臣陶晴賢の親族であるために、同様に謀反人とみなす、よって腹を斬ること。ただし当主大内義長については、晴賢らに擁立されただけであるため罪は問わず、助命し実家である大友家に送り届けること。

軍評定の席にわたくしはおりませんでしたから、どのようなやり

取りがなされたものかくわしくは知りませぬ。ただ、最後まで戦いたいと訴えた御屋形様に対し、諸将の間には、御屋形様のお命が何よりの大事と、和睦を唱える声の方が多かったそうでございます。そして何より、隆世様が、和議を容れるよう、御屋形様に説かれたのだそうでございます。

その夜、御屋形様は部屋に隆世様をお呼びになりました。雨戸を開け放ち、縁先に簡単な酒の膳を用意させ、傍らの灯明に照らされ闇間にうっすらと浮かび上がる庭の景色を眺めながら、御屋形様は隆世様を待っておられました。月もない夜の中に、城山の全体が、何か物凄いばかりに静まり返っておりました。まだ夜更けという程の刻限でもなく、常ならば雑兵どもの陣小屋の集まっている盆地の方から、何やかやと騒ぐ声が聞こえるのでありましたが、恐らく毛利より書状の届いたことは既に城じゅうの耳に入っていたのでありましょう、その夜に限ってはそういった物音は唯の一つも聞こえて参りませんでした。

昼のうちは、ともすれば汗ばむほどの日もございましたが、しかし日が落ちたのちは、勝山は未だに寒うございました。殊にこの夜は、城山を覆う静けさがそのまま寒さとなったような、何とも言えぬ底冷えが肌身に沁みました。隆世様はじきに参られ、御屋形様はわたくしに人払いを命じられました。部屋を下がりしな、わたくしは隆世様の方をそっと窺いましたが、その様子は御屋形様と座談するために訪う普段と何ひとつ変わりなく、しかしそこに隆世様の決意のほどが表れておりますようで、部屋を下がり暗い廊下をひとり歩みながら、わたくしは心に、と申しますよりは肉の一筋一筋に、切るような痛みの走るのをどうすることも出来ませんでした。

勿論のこと御屋形様は、自害を思いとどまるよう説得するため、隆世様を呼んだのでございます。けれど如何にお言葉を尽くされよ

うとも、隆世様の心を翻すことは出来なかったのでございました。
翌日、つまり昨日のことになりまする、隆世様は御屋形様に慌ただしく別れを告げられますと、そのまま、毛利方の検使役の前で自害なされたのでした。

（七）

御屋形様の話に戻ることと致します。館に着きますと、御屋形様は小姓らを集め身仕舞いにかかられました。帯を取り、小袖から下帯から全て解かれ、素裸になりました。手伝わせて真新しい下着を着けているところへ、お召しものが運ばれて参りました。ぬめるような練り絹の布で仕立てられた素襖（すおう）でございます。つややかな銀鼠に染め上げた衣の、胸元と裾には金糸で観世水の文様がこまごまと描かれ、翻る度におもてに光の流水が浮かびます。何とも豪奢（ごうしゃ）なお召しものでございました。

二人がかりで広げますと、薫き染めてあった沈香の香りが、それこそ溢るる水のように部屋を満たしました。後ろへ回って着せ掛けますと、衣は意志あるものの如くに御屋形様の肩へつるりと纏（まと）いつきました。香油を塗り込んだ櫛で髪を梳き直させ、頬に薄く紅おしろいを差しました。これらは全て昨夜のうちに、衣装はこれを、薫く香はこれをと、一つ一つ示しながら御屋形様が手ずから、用意させたのでございます。最後に伽羅（きゃら）の小片を、口中に含まれました。

「――参ろう」

滴るばかりの貴公子の装いを凝らして、御屋形様はお立ちになりました。静かに歩み出しますと、酔う程の香が、あたかも影の慕うが如くに、あとに付き従いました。廊下を進み館を出ると、諸将の方々がもう、駕籠の周りに集まっておられました。御屋形様のお姿を認めると、一斉に視線を落とし小さくこうべを垂れました。言うべき言葉を失っているようでもあり、御屋形様のお言葉を待っているようでもありました。

と、その中から急に、備前守様が、崩折(くずお)れるようにがっくりと地に片膝をつかれました。太い腕で顔を覆い、声は聞こえませぬが泣いておられるようでございました。備前守様は最後まで開城に異を唱えられたおひとりでございましたから、城を去られる御屋形様のお姿がとりわけ、堪え難きものであったのでございましょう。御屋形様は備前守様の方へ歩み寄られました。肩に手を置き、身を屈めると低い声で二言、三言、何事か申されました。小さな啜り泣きの声がおちこちに広がりました。

身を起こし、あとは一言も発せられず、居並んだ諸将らひとりひとりにじっとまなざしを注がれたのち、わずかな供を連れて御屋形様は、長福寺へと向かう駕籠の人となられたのでございました。

それからのことは手短にお話し致します。我々が長福寺に着き、一刻ばかりも過ぎた頃、毛利より使者が参りました。福原貞俊殿ではなく、毛利元就殿の使者でございました。その者は元就殿の意向であるとして、御屋形様に、「ご辞世致し賜りたく」と告げたのでございます。場は騒然となりました。無理もございません。御屋形様の助命が、和睦の条件であったはずでございました。そしてそれと引きかえに、隆世様は腹を斬られたはずでございました。宿老の野上房忠様などは、やむを得ぬとは申せ、はたちそこそこの隆世様に詰め腹斬らせたことに心を痛めておいででしたから、

「腹を斬らせたそのうえ、恥知らずにも約定をたがえて騙し討ちにするとは、もののふの、いや人のすることか」

と鬼の形相で斬り捨てんばかりに使者に詰め寄りさえしました。しかし、唯御屋形様だけは、うろたえた様子をお見せになりませんでした。眉ひとつ動かさず皆を押しなだめると、

「身を清めたい。仕度せよ」

一言、命じられました。その時、わたくしは気づいたのでございます。主郭で、御屋形様は朝げはいらぬと申されました。腹を空にしておきたいのだと。あれは、御腹を召される用意であったのではございますまいか。自らの命がどのみち助からぬと、御屋形様は知っておられたに相違(そうい)ございません。

（八）

今となっては申しても詮なきことなれど、毛利よりの助命の申し出を、我々は疑ってかかるべきでございました。先に申しました通り、元就殿は、陶様隆世様、ひいては御屋形様までもを、先代義隆公を弑した罪人と断じ、仇討ちと申して周防を攻めたのでございますが、しかしまことの狙いは、義隆公の正統の跡継ぎを名乗り大内の領地を我がものとすることにございました。そうである以上、御屋形様の、大内家嫡流のお血筋は、元就殿にとってのちのちの禍根の種でございます。そのような御屋形様を、元就殿ほどの智恵者が果たして生かしておきましょうか。

しかもかつて、元就殿はこれと全く同じ非道を、なさったことがあったのでございました。二年前の秋でございます。陶方の出城であった安芸の矢野保木城が、毛利の軍勢に攻められ落城致しました。その際元就殿は、刀を捨て降伏した城兵をとある寺に押し込め、しかるのちに寺を刃で囲み、皆殺しに及びました。また援軍として入っていた周防衆の兵は、国へ送り届けると言って騙され、道も半ばにさしかかった所で、伏せおかれていた毛利の手の者に残らず討ち取られました。このようなむごきことが、かつてあったのでございます。

皆も忘れていたわけではございますまい。けれども我々には、九割方諦めていた御屋形様のお命が助かったという気の緩みがございました。そして何より、かたくなな思い込みがございました。大内家は数百年来の名家であり、もともとは毛利の主家でございます。その大内の当主をよもや騙し討ちにする腹があろうとは、誰も、思いもよらぬことだったのでございました。我々は言わば、大内の名を盲のように信じたのでございます。そして隆世様もまた、それに

目を曇らされ、最後の最後に、元就殿という人間を見誤ったのでございました。その中にあって唯御屋形様のみが、自らの血を見限っておられたとは皮肉と申すより他ございません。

ここに、御屋形様の辞世がございます。

誘ふとて　なにか恨みん　時来ては
嵐のほかに　花もこそ散れ

しかしこれは毛利とのいくさが始まった頃、御屋形様がまだ山口に居られました時に詠(よ)みおかれたもので、もう一首、つい先程湯あみの仕度を待つ間に急ぎ筆を引き寄せ書きつけたものがあるのでございます。

玉の緒よ　幾世経るとも　繰返せ
なおおだまきに　掛けて恨みん

この歌を、わたくしは密かに寺の者に託そうと思うております。辛き心の内は何ひとつ洩らさぬままに去られた御屋形様でございました。この歌が失われることなく残ったならば、のちの世には御屋形様のご無念を汲んで下さる者もおりましょう。今はそれのみ、願うしだいでございます。

わたくしはこれから御屋形様のお供を仕りまする。御屋形様は今頃、闇の道を隆世様を追い、足を急がせておりましょう。この世の悉(ことごと)くは夢であると隆世様は申されました。全ては夢の世から至り、束の間うつつとなってのちは、過ぎ去って再び夢に戻るのだと。晩春の陽光が寺の庭に注いでおります。ツツジの、山吹の、椿の、花々は目も綾(あや)に咲き乱れ、刺す程にまばゆい光の中に燃え落ちて行くようでございます。ただ、光ばかり。毛利のつわものどもが囲んで

いるはずであるのに、何の物音も致しませぬ。皆々、成り行きを窺い、声を殺し息をひそめておるのでございましょうか。それともわたくし自身が、既にいつしか夢の世に踏み惑うたのでございましょうか。今はもう、勝山に人は絶えておりましょう。御屋形様の立っておられた主郭にも仄めく影すらなく、この、澄みきった光だけが溢るるばかりに降り注いでおりましょう。風の音も、葉叢（はむら）のひそやかな囁きすらも聞こえませぬ。ただ晩春の美しき陽光ばかりでございます。長き栄華を見た大内家がとこしえに夢の中へと去る、それにふさわしい日ではございますまいか。

（八）（後書き）

主人公の杉民部は実在の人物です。作中のとおり、長福寺（現・功山寺（山口県下関市長府））で義長に殉じており、境内には義長と並んで墓所があります。

義長の辞世については、「誘ふとて…」の方は「陰徳太平記」、「玉の緒よ…」の方は「豊府史略」に、それぞれ伝わっているものです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1590m/

勝山春記

2010年10月10日14時30分発行